In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	現代マレーシアにおける競合する国家像についての覚書
Author	多和田, 裕司
Citation	人文研究. 60 巻, p.256-269.
Issue Date	2009-03
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学大学院文学研究科
Description	山野正彦教授 ： 中島廣子教授 ： ピエール・ラヴェル教授退任記念号

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学大学院文学研究科紀要
第60巻　2009年3月　256頁～269頁

現代マレーシアにおける競合する国家像についての覚書

多和田　裕司

本稿は、現代マレーシアにおける国家像に焦点をあてながら、マレーシアの人々が生きる現実の多様性を提示するものである。

第1節では、マレーシア人一人一人が生きる現実を理解するためには、国家像の多様性への着目が必要となることが指摘される。第2節でマレーシアの独立記念式典が詳細に紹介された後、第3節では式典の分析を通して、マレーシアが描く公的国家像とはマレー系の主導のもとで多民族が調和的に生きる国家であることがあきらかにされる。第4節ではそのような公的国家像とは異なる国家像が存在することが、近年マレーシアで大きな話題となったふたつの事件から議論される。最後に第5節では、公的国家像が前提とする民族というカテゴリー自体が経済発展がもたらした社会変化によって変わりつつあること、そしてこれまでにない新たな現実が生まれつつあることが論じられる。最後にこれらの事実をもとにマレーシア国家分析のためたの今後の検討課題が提起される。

I　競合する国家像

2008年8月17日の夜、マレーシア中の注目が北京オリンピック男子バドミントン、シングルス決勝に注がれていた。決勝に進出した中国系マレーシア人の代表選手に、同国初の金メダルの期待がかかっていたのである。残念ながら試合には敗れ金メダルには手が届かなかったものの、彼の活躍にたいして熱狂的な賛辞が送られた。それとおなじ頃、マレーシアの一部ブロガーたちの間で、国旗を逆さまに掲揚しようというキャンペーンが始められた。独立記念日が近づき、国旗を目にすることが多くなるなかで、政府にたいする批判を逆さまの国旗に込めようという提案であった。一見するとまったく無関係なふたつの出来事を結びつけるのは、もちろん「マレーシア人であること」という一点である。マレーシア人であるからこそ代表選手の活躍に感動し、マレーシア人であるからこそ国旗をもちいて政府への不満を表明するというパフォーマンスが成り立ちうる。

マレー、中国、インド、イスラーム、西洋等、さまざまに異なる要素を内部に抱えながら独立を果たした多民族国家にとって、マレーシアという「ひとつの国家」を作り上げる作業は、独立以来の最大の国家的課題であった。しかし独立からすでに50年を経過した今日、その地に暮らす人々にとっては「マレーシア国家」や「マレーシア国民」は間違いなく実体として意

識されている。それが国家による意図的なものであれ、あるいは日常生活のなかでの自然発生的な結果として生じたものであれ、この間の国家が構築される過程とそのメカニズムを検討することで、マレーシア理解の深度が深まったことはたしかである〔Khan & Loh (eds.) 1992、Millner 1994、Shamsul 1996〕。

しかし、アンダーソン〔1987〔1983〕〕やホブズボウムとレンジャー〔1992〔1983〕〕以来積み重ねられてきた「国家の構築性」といういまや当然の論点を十分に踏まえたうえで、ここでさらに問わなければならないのは、構築されたものとしての国家を万人にとって同一の存在として見なすことが可能であるか否かという点であろう。言い換えるならば、人々が自らその一員である国家や国民を想像するとき、想像された国家や国民のあり方には微妙な差異が存在するのではないかという問いである。おなじ国に属しおなじ国民であることが実体として感じられていたとしても、個々人が描いている国家や国民は同一であるとはかぎらない。国家の実体化は予定調和的になされるものではなく、個々人による無数の実体化の競合とそれらの相互作用のなかで進展するのではなかろうか[1]。

同一の国家や国民として実体化されながらも、実体化されたものの内実が異なるような形でなされたものを、ここでは国家像という言葉で表すことにしたい。マレーシアの場合に即していえば、マレーシア国家とそれを構成する国民の確かさを誰もが思い描く一方で、多民族が調和しながら暮らす国家なのか、あるいは競争や対立のなかで暮らす国家なのかというそれぞれの国家像によって、人は相異なる現実を生きているということになろう。マレーシア国民一人一人に焦点をあわせれば、彼らは国民として同一の存在でありながら、彼らが働きかけ、そして働きかけられる現実の世界は、国家像の違いによって複数存在するのである。

個人の国家像の違いによって生じる「相異なる現実」とはどのようなものか具体的に考えてみよう。たとえばマレーシアではマレー系を優遇する大学入学者選抜制度を有している。これは植民地時代以来経済的に劣位の状況に置かれたマレー系への救済策であり、それによって民族間の格差を是正することを目的とした制度である。仮にある中国系マレーシア人がこの制度のもとで大学入学に失敗したとしたら、調和的な国家像を抱いている場合、彼は自らの失敗を能力の不足や時の運などに帰しながら、ある程度仕方のないことと諦念するだろう。しかしその人物がもし対立的な国家像を持つ者であれば、自らの希望がかなわなかった理由はまず第一に他民族（マレー系）にむけられるであろう。もちろん実際にはこのような単純な理由付けだけがなされることはないであろうが、どのような国家像を抱いているかによって、おなじ出来事（この場合は大学入学の失敗）であってもまったく異なる現実のなかで生きることになるのである。

これら複数の（正確には無数の）国家像は、もちろんどれもが対等な力を有するものとしてあるわけではない。政府や各界エリート層の国家像がそうでない者の国家像よりも強い力を

持っているであろうことは想像に難くない。制度や政策の策定、メディア操作などを通して、彼らの現実はそれがまるで唯一の現実であるかのように国のあり方を規定していく。しかしだからといって単一の国家像のなかにすべての現実が収斂されてしまうことはありえない。たとえ強い国家像からの影響を受けようとも、自らの生活経験によって培われた国家像とそれによって生きられる現実は人々の数だけ存在し続ける。

本稿では、国家形成や国民統合において文化が果たす作用をさらに検討するための準備作業として、国民として想像/創造されたマレーシア人が生きる現実の多様性を提示しておきたい。以下ではまずマレーシア政府が抱く国家像を独立記念式典の行事を通してあきらかにする。国家儀礼を対象とするのは、儀礼のなかにこそそれを実践する者の理念や理想が埋め込まれているからであり、それと同時に、儀礼におけるパフォーマンスが参加者たちの身体に理念を刻み込むものであるからである。それに引き続いて、政府が抱く国家像とは異なる国家像を生きる人々の現実について指摘する。

II　マレーシア独立記念式典

(1) 概要

1957年8月31日午前0時、おおよそ130年近く続いたイギリスの植民地支配から、現在のマレー半島部諸州がマラヤ連邦として独立した。その後1963年9月16日に、ボルネオ島のサバ、サラワク、およびシンガポールが連邦に編入されマレーシアが結成された。現在の形になるのは1965年にさらにシンガポールがマレーシアから分離独立して以降のことであるが、マレーシアでは1957年の8月31日を独立の日と定めている。

この日に先立つ一月ほどの間、マレーシア各地は国の誕生を祝う数多くの行事に彩られる。例年8月の中旬にもなると、クアラルンプールをはじめとする各都市のそこかしこに国旗が掲げられる。政府系の建物は言うに及ばず、民間企業、交通機関、オフィスビルやアパート、果ては自家用車にまでマレーシア国旗が翻る。政府も大臣などが街頭に出て国旗を配布するなどのパフォーマンスで国旗掲揚を国民に呼びかける。おなじ頃から、テレビでは番組の合間合間にいわゆる「愛国歌（Lagu-lagu patriotik)」[2] が繰り返し流される。おなじく独立記念日用の特別のコマーシャルもこの頃から放映されるが、なかでも政府系の大手石油会社であるペトロナス社のCMは毎年趣向を凝らしたもので、視聴者のナショナリスティックな感情をかき立てるつくりになっている[3]。独立を記念する行事は、主管官庁である統一・文化・芸術・文化遺産省主催のものだけでも21に及び（2008年の行事)、これ以外に民間等で独立の名をつけたイベントまで含めると(たとえば独立バーゲン、独立ディナーなど)その数は数え切れない。

しかし人々にとって独立記念行事として直ちに思い浮かぶのは、独立記念日の午前零時を喫してなされる「ムルデカ（Merdeka：独立)」の唱和であり、独立記念日当日の朝におこなわ

れるパレードである。

独立記念日前日の30日の夜、マレーシア各地では午前零時のカウントダウンにむけて様々な催しが開かれる。有名歌手を招いての野外コンサート、伝統的な歌や踊りの披露などのイベントが、政治家や各界著名人等が参加するなかで執りおこなわれる。会場となる広場や公園、広い通りに仮設された特設ステージなどに、人々は自由に無料で参加することができる。政府が主催する大規模な会場では1万人以上もの人出を数えることもしばしばである。すべての会場において30日から31日へと変わる瞬間、主催者あるいは主賓の発声にあわせて「ムルデカ」という言葉が7回唱和される。7回というのは独立時に当時の首相であるトゥンク・アブドゥル・ラーマンがこの言葉を7回高らかに唱えた故事にしたがったものである。

翌31日の午前中には、首都クアラルンプール（会場は年によって変更されることもある）ならびに各州の州都で、国王（州の場合は州統治者）および閣僚列席のもとにパレードが挙行される。パレードの模様はテレビで全国中継されるとともに、各地の様子を結んでそれぞれの独立記念式典の様子が報告される。この日は当然のことながら国民の祝日であり、パレードが終わった午後には、人々は皆昂揚した気分のなかで一日を過ごすことになる。前夜のカウントダウン・イベントが人々が自由に参加し喧噪とともに進行するのにたいして、パレードではすべてが整然と進められていく。

(2) 2008年独立記念式典

本年（2008年）の政府主催のカウントダウンは、新しい趣向としてダタラン・ムルデカ（Dataran Merdeka：ムルデカ広場）、KLCCパーク、ブキット・ビンタンの三カ所に分散しておこなわれた。アブドゥラー首相、ラザク副首相、オン・カ・チュアン住宅・地方政府相（MCA幹事長）がそれぞれの会場での主役としてカウントダウンの式典を司った。カウントダウンは三つの会場を結びながら国営テレビで全国に生中継された。

三カ所の選定やそれぞれに配置された閣僚は、この国の歴史と現在のありようを映し出すものである。ダタラン・ムルデカはイギリス植民地時代の建物が建ち並ぶ地区にある広場で、当時から様々な行事が開かれた歴史的な場所である。KLCCパークは近年再開発されたKLシティ・センターにある公園で、その一角には現代マレーシアの発展を象徴するペトロナス・ツインタワーがそびえ立っている。ブキット・ビンタンはいわゆるチャイナタウンに隣接する商業地区で、いくつかのショッピングセンターが集まり、とくに昔から中国系マレーシア人に人気の高いエリアである。そのうえでメイン会場であるダタランには現首相が、KLCCパークには次期首相がほとんど約束されたといってよい副首相が、そしてブキット・ビンタンには与党連合の一角を占める中国系政党MCAの党幹事長が配されているのである。このような式典の枠組み自体が、後述するような、民族の統合を謳いつつもその一方で国家におけるマレー系の

中心的地位を当然視する国家像を体現しているといえよう。

30日の夕方からダタラン・ムルデカでは、広場前の通りでの車両の通行が全面的に禁じられた。広場に面した代表的コロニアル建築である連邦裁判所ビルはムルデカという文字飾りとともに明るくライトアップされ、その威容を夜空に照らし出してる。広場では臨時に設営されたコンサート会場で有名アーティストが次々に歌を披露していくなか、多くの人々がカウントダウンとそれに続く花火の打ち上げを待っている。

午前零時少し前、アブドゥラー首相夫妻を乗せた車が会場に到着する。首相夫妻はマレーシアの各民族集団の衣装を身に纏い手に手に国旗を振る51人の子供たちに先導されながら式典会場に入場する。首相到着の紹介がなされたあと、こちらもまた民族衣装に身を包んだ別の子供たちが現れ、子供たちを代表してマレー系の少年が首相にマレーシア国旗を手渡す。その国旗が今度は首相から国家奉仕訓練プログラム[4]の制服を来た7名の青年たちに手渡され、世界一の高さと称される国旗掲揚塔に運ばれる。13才の少女が『独立の船（Bahtera Merdeka)』を独唱するなか、首相夫妻に引き続き、北京オリンピックのバトミントン銀メダリスト、マレーシア初の宇宙飛行士、初のエベレスト登頂者などのマレーシアのヒーローたちも次々に子供たちにエスコートされ、壇上へと上がっていく。午前零時とともにアブドゥラー首相の「ムルデカ」という発声を合図に会場にいるもの全員が7回それを繰り返した後、国歌の大合唱とともに国旗が掲げられる。その後数々の「愛国歌」が会場にいるもの皆で合唱され、夜空には花火が盛大に打ち上げられる。

翌日おなじダタラン・ムルデカではもうひとつの独立記念行事であるパレードが挙行された。パレードは狭義のパレードを含めて全体で5部構成となっている。

第一部は国王の到着である。午前8時ちょうど、一足先にダタランに到着している首相や閣僚、外国公館使節などが待ちかまえるなか、国軍の制服を身に纏った国王夫妻が到着する。ダタランに向かって設置された貴賓席に国王、閣僚が整列し、近衛儀仗兵が国歌を吹奏する。ダタランではマスゲームに参加する2880人の小中高生たちが人文字で国旗を描くように隊列を組み、向こう正面の仮設スタンドでは、教育大学の2000人の学生たちが「Daulat Tuanku（国王陛下万歳)」の人文字を浮かびあがらせている。国歌吹奏に引き続いて国王が貴賓席から道路へと降りたち、正面に整列した近衛儀仗兵を閲兵する。国王が自席に戻るやいまいちど国歌が吹奏される。

第二部は学生たちの国歌の合唱で始まる。「愛国歌」のメドレーにあわせてダタランにいる子供たちのパフォーマンスが披露される。続いて7名の選抜された学生によって「ルクネガラ」[5]が、国王や首相に正対するかたちで、宣誓される。ダタランの子供たちやスタンドの学生たちもそれに唱和する。宣誓の後「ムルデカ」のかけ声が7回おなじく全員で唱和される。引き続いてダタランでは子供たちが、音楽に合わせて今年の独立記念式典のロゴマークや宇宙ロケットなどのさまざまな図柄を人文字で描いていく。

第三部がパレードである。まず戦闘服を着た近衛部隊が行進の先頭を進んで行く。続いて60名の国家奉仕訓練プログラムの若者が大きな国旗を運んでくる。その後ろには、一人一本づつ計60本の国旗とそれ以上の数の各州の旗が続いていく。上空では各州の旗をぶら下げた14機のヘリコプターが会場を通過する。その後、各界の著名人を乗せたオープンカー、小中高大の生徒や学生、各省庁、有名企業などのグループがそれぞれそろいの衣装に身を包み行進していく。警察、消防に引き続いて、国軍が、戦車、ミサイル車両、上空を通過する戦闘機などとともに行進のしんがりを飾る。

第四部は「団結する民衆の姿（Persembahan Komponen Rakyat Bersepadu：直訳すれば団結する民衆を王に捧げるという意)」と題された、6800人によるパフォーマンスである。各人が小さな国旗やハンカチ、傘、旗などを持って、ダタラン前の道路一杯に広がる。「愛国歌」が次々に合唱されるのにあわせて、手に持った小物を巧みに打ち振りながら全身で踊っている。最後には再び国歌が合唱され、「ムルデカ」「ダウラート・トゥアンク」がそれぞれ7回と3回全員で唱えられる。

最後の第5部ではもう一度近衛儀仗兵が登場する。儀仗兵が国王以下貴賓席にいる人々にたいして国歌を吹奏する。そして国王夫妻が到着時と同じ最高級国産車プロトン・サヴィー（Proton Savvy）で会場を後にし、記念式典の幕が下ろされる。

Ⅲ　公的国家像

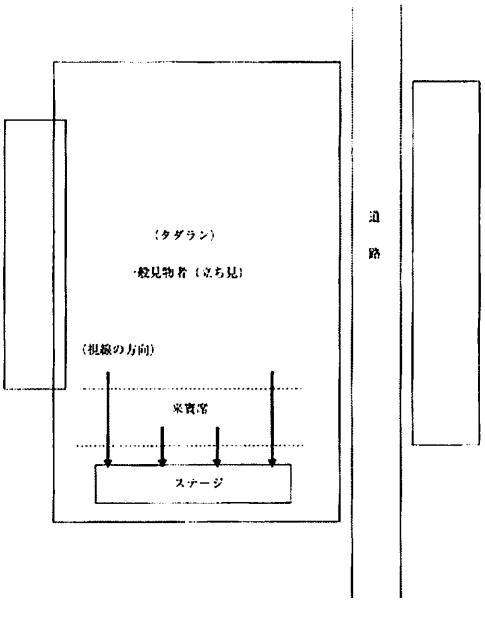
一連の独立記念式典のなかに、マレーシアが抱く国家像と、式典に参加する者にそれを次々に身体化させていく仕掛けを容易に見いだすことができるだろう。あふれるマレーシア国旗、繰り返される国歌と数々の「愛国歌」、壇上で手を振る政府指導者や著名人たちから国王が乗る国産自動車にいたるまで、式典においては「マレーシア」が無数にその姿をあらわしている。国家が可視化されるのは式典のなかだけではない。例年8月の後半ともなると、テレビでは日本軍政時代や独立直後の共産ゲリラとの戦いを描いたおきまりの歴史映画が放映される。朝のトーク番組には各界の老人たちが招かれ、これまでの苦労と現在の幸福をそれぞれに物語る。コメディ番組の出演者までもが番組のそこかしこで「ムルデカ」と繰り返す。町中に掲げられた国旗や首相似顔絵の飾り付けなどとあいまって、この時期のマレーシアでは国家はきわめて可視的な存在となる。

可視化されたマレーシアは、式典のさまざまなパフォーマンスに自ら加わることによって個々の人々のなかに身体化される。皆でいっせいに「ムルデカ」と片手を突き上げて叫ぶとき、サッカーフィールドくらいの広さのダタランに立錐の余地のないくらいに押し合いながら国歌や愛国歌を合唱するとき、あるいはパレードの一糸乱れぬ統一のなかで行進するとき、人はマレー系（あるいは中国系、インド系）としてではなく、マレーシア人として存在する。

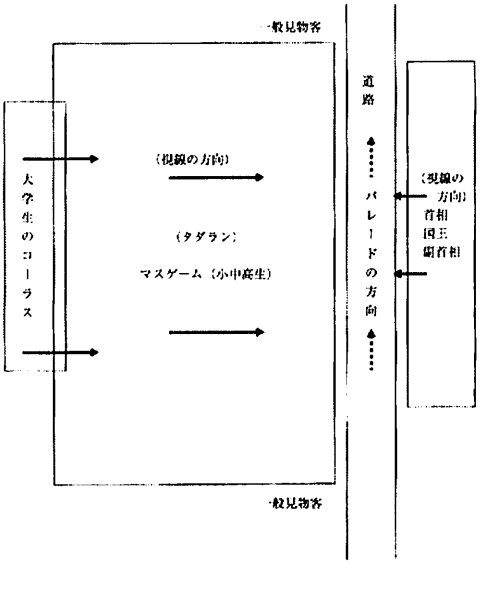
ところで二日間の式典を詳しく見ると、両者からは正反対の理念やメッセージを読み取ることができる。具体的にみていこう。

第一に式典会場の配置である（図－1、2を参照)。30日の式典では便宜上首相夫妻などの来賓客にたいして座席が設定されているものの、一般客との間は簡易な柵が設けられているだけである。一般客は自由にダタランに出入りすることができるし、そのなかで好きなところに移動することができる。首相の入退場にさいしては警備員が間に入ろうとはするものの、近くにいた人々が我先にと押し合って首相に握手を求めていた。しかも特設ステージにたいして式典に参加する人々すべてが「同じ」視線を共有する。これにたいして31日のパレードでは、会場がマレーシア社会を構成する各要素に明確に分節化されている。ダタランでパフォーマンスする小中高生、特設スタンドの大学生、パレードに参加する「大人」たち、パレードのなかの官と民や軍と民、さらにそれらの人々と正対する国王と首相その他の指導者たちという区分である。しかもそのとき、すべての視線は国王（および首相）へと収斂する。

二つの式典の対称性を具体的に示す第二は、式典に参加する人々の服装である。30日は一般の参加者はまったくの普段着で式典を見物している。首相はこの国の代表的服装のひとつであるバティック地のシャツを身にまとっている。興味深いことに首相の身辺警護の警官も同じようなシャツを着ている。「制服」を着ているのは、ごく一部の警官と市役所の職員くらいである。それにたいして31日のパレードでは「制服」が「私服」を圧倒する。国王の軍服、近衛儀仗兵の礼服、首相以下閣僚たちが着ているサファリ風ジャケット、学生たちのスポーツウェア、パレードする人々の揃いの衣装、警察、消防、軍隊。式典の参加者はすべてなんらかの「制



図－1　30日カウントダウン・イベント時の会場配置



図－2　31日パレード時の会場配置

服」を身にまとっているのである。

第三の対称性は式典への参加の区分である。30日の式典では国歌をはじめとしてほとんどの「愛国歌」が会場にいるもの皆で合唱される。式典の進行役も自ら音頭をとり、ダタランにいる人々に歌うことを促す。これにたいして31日のパレードでは、確かに合唱はされるもののそれはあくまでも式典参加者に限られるものであり、ダタランの周囲にいる一般の見物人はあくまでも「見物」人であって、それに加わるということはない。

31日の午前零時を境に、式典を貫く要素が熱狂のなかの「一体化」から「序列化」された秩序へと一転するのは、国の独立・誕生というこの国の起源がどのようなものとして公的に規定されなければならないものであるのかを端的に表現している。独立による国家の形成は、たとえ現実の歴史ではそうではなかったとしても、理念の上では多様な民族や、指導者と民衆が一致団結し国民となることによってはじめて達成された。しかしひとたび国家が形成されたならば、そこでの多様性の容認はあくまでもひとつの秩序を前提とするものでしかありえない。その秩序とはもちろん、多民族国家において国王位に象徴されるマレー系が中心に位置する秩序にほかならない。独立を記念するふたつの式典は、国家の存在を可視化しながら、マレーシアの、公的にあるべき姿を提示しているのである。

Ⅳ　公的国家像に抗する現実

独立記念式典で表現されるような理念は、たしかにマレーシアにとってのひとつの現実であることは間違いない。1969年の民族衝突事件を受けて強化された「マレー系が主導する多民族国家」という国家像は、当初は民族間の対立を強引に押さえるためのものであったとはいえ、いまや民族の別なく広く受け入れられるものとなった。しかも現在では多くの人々が自らの国について多民族、多宗教の共生が成り立っていること自体を積極的に評価するまでにいたっている。政治家はこの国が多民族がともに生きる国であることを強調し、人々が自らの国を紹介するときにも多民族が共生することのすばらしさに言及する。

しかしながら現在のマレーシアを考えるうえで、一見したところ確固たるものであるかのようなこのような現実と競合する別の現実が存在することも見逃すことはできない。それは、公的な国家像を通して生み出される現実とおなじ枠組みを共有しながらも、公的なものとは異なるような国家像によってもたらされる現実である。より具体的に述べれば、マレーシアは多民族国家であるが民族間の調和などはまったく達成されておらず、民族間には依然として深い溝が存在するという国家像によって生じる現実である。

2007年11月、独立50周年を祝う式典を終えたばかりのクアラルンプールで、インド系NGO団体の連合体であるヒンドゥー権利行動隊（HINDRAF）の呼びかけによる大規模なデモが挙行された。主催者側発表で3万人を動員したこのデモの公的な目的は、英国植民地時代

にインド系住民が受けた苦難の補償を求めるべく、英国女王宛の手紙を在マレーシア英国高等弁務官事務所に提出するというものであった。マレーシア政府はデモの実施自体を禁じ事前にデモの中止勧告を出していたがデモ隊はそれに従わず、デモ隊とそれを阻止しようとした警官隊との間で負傷者までだすことになった〔SUARAM 2008: 99-101〕。

英国植民地時代に主としてプランテーション労働力として流入した人々にその起源をさかのぼるインド系は、現在総人口の約8パーセントを数えるが、マレー系や中国系に比べると社会的にも経済的にも相対的に弱い立場に置かれている。ヒンドゥー権利行動隊が英国へ訴えたのは、インド系を搾取し、独立時に現在のマレーシアの国家枠組みを認めたことによる周縁化の責任であった。

もちろん、ヒンドゥー権利行動隊の行動が真に向けられていたのは英国政府ではなく、マレーシア政府であることはあきらかである。この事件の直接的な引き金は土地を「不法占拠」しているとされたヒンドゥー教寺院を行政当局が取り壊すという事例が続いたことによるものであるが、この点にかんしてヒンドゥー権利行動隊はブラウン英首相宛の書状のなかで、「インド系にたいする民族浄化」という強い言葉で批難している〔Lee 2008: 190-191〕。この事件は、これまで少数派として周縁化されてきたインド系住民の不満や窮状が一気に噴出したものであり、民族の調和が達成されたかに見えるマレーシアにおいて、別の現実が存在することをまざまざと見せつけたのであった。

ところでヒンドゥー権利行動隊の主張にたいして、政府および与党連合側ばかりではなく、野党各党からも批難の声が上がったことは注目に値する。イスラーム政党であるPASはヒンドゥー教徒の抗議の権利は認めるもののその主張は極端であるとして、政府になんらかの措置を取るべきことを求めている。おなじく反政府の立場に立つマレー系が主導する正義党もマレー系の特権を認める憲法153条に挑むべきではないとの見解を発したのであった〔Lee 2008: 191〕。非マレー系から表明された民族的不満にたいしては、政府与党側はもちろん、野党の側といえどもマレー系であるかぎりにおいて容易に同調することはできないのである。

おなじく2007年、インターネットを通して発表された中国系マレーシア人の手になるある曲をめぐっての騒動も、公的な国家像が描く多民族調和という現実が、やはり数多い現実のひとつであるにすぎないことを人々に思い出させることになった。国歌（Negaraku：我が祖国）にたいして「Negarakuku：私の我が祖国」というタイトルのついたこの曲は、作者が感じるこの国の現実を、ラップのリズムに乗せて歌い上げている。ほとんどのメディアが政府のコントロール下にあるマレーシアでは、公的な国家像に反するものが不特定多数にたいして発信されることはこれまでは皆無といっても過言ではなかった。そんななかでインターネットの発達が新たな表現手段をもたらしたのである。

台湾留学中に作成されたこの曲は中国語で歌われているが、インターネットにアップされるやいなや英語字幕、マレー語字幕のついたバージョンが第三者によって作成された。曲は本来

の国歌のメロディーの合間合間に自身のラップ調の曲が挿入される構成をとっている。歌詞のなかでは交通違反にたいして裏金をせびる警官、うるさいモーニングコールと皮肉られるアザーン（注：イスラームの礼拝の呼びかけのことであり、モスクに設置されたスピーカーから流されることが多い）、公務員の怠惰な仕事ぶり、教育における中国系にたいする「不公平な」取り扱いなど、マレーシアではタブー視される話題が次から次へと続けられる。さらに作者自らが出演するビデオクリップでは、多民族の協調を描く政府作成の観光広報用ビデオのなかに、警官やイスラーム教徒や公務員の姿が、歌詞に合わせて代わる代わる挿入されていく。

マレーシアではマレー系優遇政策を受けて警官や公務員の大部分はマレー系が占め、高等教育への進学もマレー系に有利な制度となっている。宗教的にはイスラームがマレーシアの国教であり、マレー系はすべてイスラーム教徒である。これらのことを考えると、この曲がマレーシアにおいてどれほどのインパクトを持つものであったかは容易に想像できるだろう。

この曲の存在が知られるやマレー系を中心に猛反発がわき起こり、作者の刑事告訴までが取りざたされた。しかしその一方で若者を中心にこの曲を支持する意見が多くのブログで表明されてもいる。結局この一件は本人および父親がマスコミを通して謝罪することで一応の沈静化が図られた。しかし、あきらかにこの曲に刺激されて作成されたと思われるビデオや曲がインターネット上で多数出回るという状況にある。

これらの出来事が示しているのは、多民族の調和をうたう公的国家像が作り出す現実とは異なる現実を生きている人々の存在であろう。彼らは確かにマレーシア国民であるという共時的な想像の産物ではあるが、それぞれに異なる世界を見ているのである。国歌のパロディが「我が祖国（ネガラク：Negaraku）」にたいして「私の我が祖国（ネガラクク：Negarakuku）」と題されたことはきわめて暗示的である。ある人々にとっては人の数だけ「我が祖国」が存在しうるのである。

V　新たな現実の出現

誰にとっても国家の存在や国民であることが自明のこととなった現代マレーシアにおける新たな現象として、従来の国家像によって構築された現実とはまったく性質の異なる現実が現れつつある点にも注目しておく必要があろう。それは、公的な国家像もそれに反する国家像もともに前提としていた多民族の存在そのものが、経済面を中心とする大きな変化のなかで失われつつあることから生じるあらたな現実である。1980年代以降マレーシアでは民族の別にかかわらずいわゆる都市中間層と呼ばれる人々の数が増大した〔Abdul Rahman 2002、Crouch 1996〕。その結果、それ以前ならば日常の経験のなかで実感することができた「三民族からなるマレーシア」という現実が徐々に薄れつつあるような事態が生じているのである。都市中間層とは高等教育を受け専門職に就き、比較的高収入の人々であるが、彼らの生活様式からはい

わゆるマレーシア（正確にはマレーシアを構成する各民族集団）の「伝統」をみることは難しくなっている。

都市中間層のなかでも上層に属する人たちは、都市近郊のコンドミニアムと呼ばれる高層マンションに居住する者が多い。多くのコンドミニアムは、数棟の高層の建物からなり、物理的にも象徴的な意味でも敷地を囲むことで「外部」からの不要な進入をコントロールしている。日本のマンション居住と同様に、住民は管理組合を作り、管理会社に委託する形で共同体内の秩序を保っている。

これらのコンドミニアムでは、民族や宗教を示すようなものは一切排除されている。たとえば住人にたいする種々の通知はすべて英語でおこなわれ、管理組合や住民総会での使用言語から住民同士の日常会話にいたるまでそのほとんどが英語によるものである。集会室や敷地内の公園などでは宗教と見なされる活動の一切が、管理規約によって禁じられている。

このようなコンドミニアムは、多民族社会マレーシアのなかの、ある種の脱色された空間と喩えることができるかもしれない。そこでは民族や宗教といった人々に差異を生みだすものが消し去られている。そこに暮らす人たちの間では、仕事や子供の教育や趣味に熱心な人はいても、民族的アイデンティティや伝統文化に固執する人を見ることは少ない[6]。たとえばその一例として、多くのコンドミニアムでは独立記念日が近づいても、敷地入り口の守衛ゲートなどの例外を除いてまったくといっていいほど国旗が掲げられていないことを指摘できる。普通それぞれのコンドミニアムは資産価値の下落を防ぐべく、独自の景観に関する管理規約を有している。そのなかでは、外部からみた建物の変更はもちろん、外部から見える形で、ものを屋外に掲げることも禁じられることがもっぱらである。その結果、国旗の掲揚率が低くなっているのである。これは低所得者層が多く居住するフラット（日本でいう中低層のアパート）では各戸ごとにきわめて高い割合で国旗が掲げられているのと好対照をなしている。

このような都市中間層の出現は間違いなく経済成長の帰結のひとつであり、これからも増加し続けるであろうことが予想される。彼らは、多民族が調和するのでもない、かといって多民族が対立するのでもない、そもそも多民族など存在しない現実を生きているのである。

Ⅵ　課題

これまで述べてきたように、現在のマレーシアでは「マレー系主導のもとでの多民族の調和」という公的な国家像によって支配された現実が構築されている。その一方で、おなじく多民族を前提としながらも民族間の対立という観点からの現実の構築もなされている。さらにはそれらとはまったく前提を異にするような現実も出現し始めている。いずれの現実を生きる者にとっても同一の共同体が想像されていることは間違いないが、国家像の相違がもたらす（社会認識なども含めた）行動の差異はきわめて大きいといわざるをえない[7]。

最後に今後のマレーシアの国家像とそれを通して人々が生きる現実を考察するさいの検討課題をいくつか挙げることで、本稿を閉じることにしたい。

第一に、想像／創造された共同体としての国家と、おなじく想像／創造されたものとしての民族との関係である。公的国家像が民族の存在を自明視し、その上にすべてを覆うものとしての国家をおいていることはあきらかである。ブミプトラ政策を代表とする政府の諸政策もすべてこのような国家像のもとで実施されてきたものであり、同時にそれが人々に「マレーシア人であること」という意識をもたらしたのである。しかしこの国家像を通して実現される現実が、きわめて危ういバランスの上に立つものであることも見逃すことはできない。公的国家像が民族を構成要素とするものであるかぎりにおいて、たとえそれが民族間の調和を強調するものであったとしても、そこにはつねに民族間の対立という別種の国家像とそれによる現実が形成される可能性がついてまわるからである。想像／創造されたものとしての国家と民族の関係は、これからのマレーシア国家や社会を考える上での主要な論点となるであろう。

第二に、現在マレーシアで広がりつつある民族を忘却させるかのような現実が、公的国家像やそれに対抗する国家像を変容させるか否かという点である。あらたな現実を生きる人々の数はいまのところは圧倒的な少数にとどまっている。しかしその数は経済発展とともに、民族の別を問わず拡大していくであろうことが予想される。1991年マハティール前首相によって打ち出された2020年構想（Wawasan 2020）のなかで、2020年までに先進国入りを果たすというマレーシアの国家目標のひとつとして「マレーシア人（Bangsa Malaysia）の創造」が掲げられていた。筆者はかつてこれらの脱民族的な人々こそが2020年構想でいうところのマレーシア人の中核をなしていくのではないかと予想していたが〔多和田 1999〕、現状では、彼らはむしろナショナリズム的な意識からはもっとも遠いところに位置しているようにも思われる。このような人々が増えたとき、はたして政府はどのような国家像を打ち出していくのであろうか。

最後に、想像／創造の共同体としての国家や民族とはまったく別次元に位置するような、人間の結びつき方の可能性についての検討である。もし脱民族的な指向を持つ人々が増大し、しかも彼らが既存の国家像が作り出す現実とはまったく異なる現実のなかで生きるとすれば、彼らを結びつけるものはいったいどのようなものとなるのであろうか。そのときマレーシアという政治的枠組みを満たすのは、複数の（あるいはそのなかのひとつの）民族でも、マレーシア人でもなく、市民的価値を共有する個人であるのかもしれない[8]。

【注】

1）マレーシアやマレーシアを構成する各民族集団が、とくに新経済政策以降の経済発展を通して政治的な側面のみならず文化的な面においても多様化、断片化してきたことを指摘したものとして、Khan & Loh (eds.) 1992、多和田 2004 がある。

2）「愛国歌（Lagu-lagu patriotik）」とはとくに定義されたものではなく、マレーシアでは新旧をとわず祖国愛や郷土愛をテーマにした曲がこのように呼ばれている。なお上田 2008 は、「愛国歌」の分析を通してマレーシアにおけるナショナリズム形成の特徴を分析している。

3）ペトロナス社の独立記念日用のテレビコマーシャルは、以下の URL で各年のものを見ることができる。http://www.aleph-one.com.my/webcast/petronas_ads/festival.htm（2008 年 9 月 21 日現在）

4）国家奉仕訓練プログラム（Program Latihan Khidmat Negara）とは 2004 年から国防省のもとで開始されたもので、18 歳になった少年少女を全国から無作為におおむね 3 分の 1 選抜したうえで、各地の訓練所において国家への奉仕意識の涵養や民族間の融合をはかるべく約 3 ヶ月の合宿訓練をおこなうプログラムである。選抜された者は特段の理由のないかぎり参加を拒むことはできない。

5）「ルクネガラ（Rukunegara）」とは、1969 年の民族衝突事件を受けて翌 70 年に制定された国家原則であり、(i) すべての国民のさらなる統合の達成、(ii) 民主的生活の維持、(iii) 富が公平に分配される公正な社会の創造、(iv) 豊かで多様な文化的伝統にたいする自由な関与の保証、(v) 近代的科学技術を指向する進歩的社会の構築のために、マレーシア国民は、次のような五原則、すなわち、神への信仰、国王と国家への忠誠、憲法の遵守、法による支配、よき行動と道徳という原則にしたがうというものである。この国家原則は学校などで日常的に唱和され、マレーシア人であれば誰でも暗唱することができる。

6）都市中間層はここで紹介したような「世俗化」「脱民族化」に向かう人々と、1980 年代から顕著になったいわゆるイスラーム復興運動に向かう人々とに二極化している〔多和田 2005: 98-102〕。いずれの方向に向かうものであってもマレーの民族性を断片化するものであることは間違いない。

7）本稿では国家に焦点を当てたために、それぞれの民族内に存在する国家像の相違についてはあえて論じることはしなかった。マレー系イスラーム教徒が抱く国家像の相違や、それによって生じる現実の多様性については、多和田 2004 を参照のこと。

8）ナショナリズム研究の第一人者であるゲルナーは、ナショナリズムを「政治的な単位と民族的な単位とが一致しなければならないとする政治的主張」と定義づけている〔ゲルナー 2000［1983］〕。彼はナショナリズムの発生を農耕社会から産業社会への転換とそれに伴う「高文化」の限定的な拡散に求めているが、彼の議論が「高文化」の国境を越えた流通が日常化しつつあるポスト産業社会においてどれほど当てはまるものであるかはなお検討が必要であろう。マレーシアの事例はそのための有効な手がかりを提供するかもしれない。

【参考文献】

Abdul Rahman E. 2002 *State-Led Modernization and the New Middle Class in Malaysia*, New York: Palgrave.

アンダーソン、ベネディクト　1987［1983］白石隆、白石さや（訳）『想像の共同体』リブロポート

Crouch, H. 1996 *Government and Society in Malaysia*, St Leonards (Australia): Allen & Unwin.

ゲルナー、E. 2000［1983］加藤（訳）『民族とナショナリズム』岩波書店

ホブズボウム、E. & T. レンジャー（編）1992［1983］前川・梶原（他訳）『創られた伝統』紀伊國屋書店

Khan, Joel S. & Loh Kok Wah, Francis (eds.) 1992 *Fragmented Vision: Culture and Politics in Contemporary Malaysia, Sydney:* Allen & Unwin.

Lee Hock Guan 2008 "Malaysia in 2007 Abdullah Administration under Siege", in Dalijit Singh & Tin

Muang Muang Than (eds.) *Southeast Asian Affairs 2008*, Singapore: Institute of Southeast Aisan Studies. pp.187-206.

Milner, Anthony 1994 *The Invention of Politics in Colonial Malaya*, Cambridge: Cambridge Univ. Press.

Shamsul A. B. 1996 "Nations-of-Intent in Malaysia", in Tonnesson, S. & Hans A. (eds.) *Asian Forms of the Nation*, Surrey: Curzon, pp.323-352.

SUARAM 2008 *Malaysia Human Rights Report 2007: Civil and Political Rights*, Petaling Jaya: SUARAM Kommunikasi.

多和田裕司　1999「マレーからマレーシアへ：マレーシアにおけるあらたな国家像への挑戦」『長崎大学総合環境研究』第1巻2号、pp.83-95.

多和田裕司　2004「『多様化』するイスラーム：現代マレーシアにおけるマレー系アイデンティティの変容」『都市文化研究（大阪市立大学大学院文学研究科都市文化研究センター）』第3号、pp.84-96.

多和田裕司　2005『マレー・イスラームの人類学』ナカニシヤ出版

上田達　2008「ナショナリズムの歌い方」石塚・田沼・冨山（編）『ポスト・ユートピアの人類学』人文書院、pp.187-212.

【2008年9月22日受付、10月31日受理】

Preliminary Study on the Competitive Visions for Nation in Contemporary Malaysia

TAWADA Hiroshi

The aim of this paper is to describe the diversity and multiplicity of the reality for Malaysian people by focusing on the various visions for nation in contemporary Malaysia.

In part I, I will point out the necessity to pay attention to the diversity of the vision for nation to understand the reality in which each Malaysians are living. Part II describes the commemorating ceremony of the Malaysian independence in detail. In part III, based on the analysis of the ceremony, I will discuss that the vision for nation defined by Malaysian authority is the one in which multi-ethnic groups are living harmoniously under the Malay leadership. Part IV discusses the different kind of visions for nation from the authority defined one by referring to two topics widely disputed recently in Malaysia. In part V it is considered that the ethnicity, on which the authority defined vision for nation is constructed, is transforming with the social change caused by the economic growth of Malaysia, and that a totally new reality is emerging. Finally, three subjects for further consideration of Malaysian nation will be suggested.